

BUILT ON

小柳建設と街の人たちをつなぐ
CSRレポート2015

工事は、
笑顔のためにある。

BUILT ON

発行・編集

(2015年4月1日発行) ①小柳建設株式会社 〒955-0047 新潟県三条市東三条1-21-5 TEL 0256-32-0006

第二中学校屋内体育館改築建築本体工事

街で暮らす人の、 安心できる大空間を。



子どもたちの思い出が積み重なっていく場所。
さらに、地元の人たちの安全基地でもある。

天井の高い、広く大きな空間には、足場が所狭しと組み立てられている。その雰囲気は、学校の雰囲気につかわしくない。平成25年度に、三条市初の小中一体型校舎として生まれた「ノ木戸小学校」。その建設工事に続き、連結している第二中学校の体育館の工事が行われている現場だ。体育館は、通常の建物とは異なり中央に大きな空間が必要とされる。天井を仕上げる為の高所作業。壁から壁までの長い距離。計画段階で綿密に足場の組み方を計算してから、工事は始まる。近年、地元の学校建設を多く請け負う小柳建設(株)の川住直人は、今回の工事についてこう語る。

「今回の工事のポイントは、建物の構造体が『鉄筋』と『コンクリート』だけではなく『鉄骨』を柱の一部と屋根に採用していること。体育館は大空間を必要とするため、中間の柱を無くすことが大前提です。当然、柱が無くても屋根が積雪などの荷重に耐えられる鉄骨の梁は非常に重量があります。組み立てられる足場は、その重力物を支えられる構造であると同時に、仕上げ工程の作業性も考えながらCADで図面を書いて計画します。また、今回の体育館工事は、12 mある天井の高さも特徴です」(川住)。

建物の構造体は、その強度や耐久性に関して絶対に妥協を許されるものではない。それは中学校の体育館という単なる教育施設を目的とした建設工事ではない、その先の目的も意識されている。

「新潟県は自然災害の多い地域です。地域の小学校や中学校は、そういった災害時に地元の人たちの避難所となります。子どもたちはもちろん、地元住民の拠点でもあります。災害時にもみなさんが安心して避難できる空間をつくるという意識をもって工事を進めています」(川住)。工期などで制約の多い現場でありながら、職人や協力会社との連携もスムーズに運び、悪天候にも負けずに順調に工事は進められている。この広々とした空間が、子どもたちの笑顔で埋め尽くされる日は、そう遠くない。



川住 直人 小柳建設(株) 建築事業部/所長

今回の体育館工事はもちろん、いつも心がけているのは、「見栄えもよくて、使い勝手のいいものをつくる」ということ。やっぱり人に喜んでもらうことが一番なので。過去に、三条高校のグラウンド工事も担当させて頂いたことがあります。次は、大きなスポーツスタジアムの建設工事などにも挑戦したいですね。

CONTENTS

すべての工事は、

人と自然
のためにある。

安全と環境に
配慮するだけでなく、
工期短縮も、
地元の人のためになる。



04

「浚渫と言え小柳建設」
を証明する。

人間が汚した川を人間がきれいにする。
高い技術力を要する毛長川の浚渫。

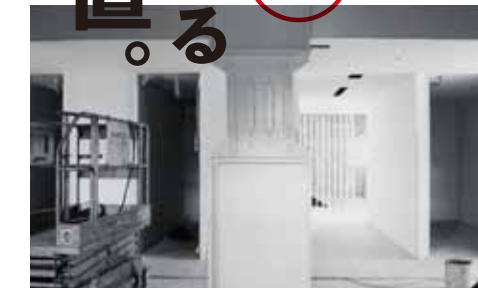
14



07

美しい消防署を支える
6本の制震装置。

洪水、地震、災害から住民を守るためと、
地域交流の拠点のための新しい消防署づくり。



東京ドームの
広さで格闘する
3cmの攻防。



4万㎡の場所で、
13万㎡の土砂を搬出する
繊細な技術。

16

10

街に、人に
貢献するための
社内での
取り組み

全長
200m。
軟弱地盤との格闘。



バイパス下を貫く
立体交差にある職人たちの
安全へのこだわり。

12

18

街に、人に
貢献するための
社内での
取り組み

20



確かな安心のために、
敷地内すべてを
考え抜く。
万が一、災害が起きた時にも、
すぐに復旧できるインフラづくり。



この地域にあった確かな歴史を、
この地域の人たちへ
伝えていくという使命。

30

掘り進めると、
古墳時代の生活が
そこにある。

想定外を想定する、
道路工事の緻密な計算。

25

災害に強い堤防を
つくる最後の仕上げ、
法面緑化。



堤防の土壌流出を防ぐためにとった、
2つの工法。

23

三条市内へ抜ける
交通の要所。
道路舗装工事の裏側にある
緻密な計画性。



後世にまで残る
仕事という、自負を胸に。

27



地元住民に喜んでもらえなければ、
その工事をやる意味なんてない。

34

70周年にあたり社長インタビュー
世のため、人のため。
70年間、
変わらぬ想い。



蝶名 林 潤
小柳建設(株) 土木事業部/所長

今回の現場では、部下である川瀬の教育もテーマの1つでした。自然を相手に、いかにスムーズに工事を進めていくのか。協力会社の方々としつかりとコミュニケーションをとれるか。まだまだ経験は浅いですが、この現場で成長を感じました。完成の美しさ、品質の高いモノづくりはもちろん、明るい現場づくりで、多くの方に満足してもらえる工事を目指してほしいですね。

川瀬 翔平
小柳建設(株) 土木事業部/主任

今回の工法・工種・作業方法でわからなかったり、自分で判断することが難しかったりした時は、上司に相談しながら乗り越えることができました。改めて上司の偉大さを実感しました。私も早く蝶名林さんのように、施工中の着眼点・判断力・決断力のある所長になれるよう、日々努力していきます。

かつ重機の扱いには、始業前点検、終了後点検を毎日行い、細心の注意を払った。また、川には魚が多く生息するため、万が一機械から油が流出した場合に備えて中和剤・吸着マットを備えるなど対策の工夫も行っている。「安全を重視する、環境に配慮する、工期を短くする。それらは、すべてここに暮らす人や自然のためです。それに加えて、発注者や地元の人、工事をしている私たちにとっても、みんなが喜ぶ工事をしていきたいです」(川瀬)。

「今回、発注者や協力会社との打ち合わせ・材料の手配・現場の測量など、あらゆる業務を任せて頂きました。上司の蝶名林と神田に助けてもらいながら、『絶対に降雪前に終わらせる』とがむしゃらでした。工程をなるべく短縮するための工夫として、協力会社との綿密な打ち合わせで週間工程を作成し、さらに朝礼時・昼のミーティング時に『どうすればもっと工期を短くできるのか』を常に話し合いながら進めました。結果として、工事は10月末で終わり、予定より約1ヶ月早く完了でき、発注者や、地元の方にも喜んで頂けました。私たちが掲げていた『工程短縮1割以上の確保』という目標をクリアすることもでき、とても達成感があります」(川瀬)。

紅葉シーズンには、多くの観光客が訪れ、釣りや山菜採りをする人たちがやって来る。そのため、なるべく一般道を塞がないように工夫した。なお

安全と環境に配慮するだけでなく、
工期短縮も、地元の人のためになる。



すべての工事は、
人と自然のためにある。

1

守門川防災・安全交付金(火山砂防)1号えん堤スリット設置工事

工事名:守門川防災・安全交付金(火山砂防)1号えん堤スリット設置工事 工事期間:平成26年2月7日～平成26年12月30日 発注者:新潟県三条地域振興局



05



04



作業に没頭できる、
職人のための環境づくり。

ローラーが動き、次々と色が変わっていく。均一に塗られていくペンキの美しさは、まさに職人技。設置されたえん堤スリットの仕上げである塗装作業を担当するのは株式会社服部塗装の金山浩之さん。小柳建設（株）との現場は、今回で2回目であるという。

「今回の工事ではとにかく少しでも長持ちできるように表面の強度を重視しています。防食のために錆び止めを二層塗りして、ペンキの膜厚にも細心の注意を払っています。決められた厚みで「基すつ塗っていくことで、塗料の性能も上げています」（金山さん）。

気温が低くなり、雨天も多い10月。それに伴って、ペンキの乾きは遅くなる。通常ならば24時間あれば乾燥するペンキも、この時期になると乾燥までに48時間ほど要する。塗り直しは許されない。それゆえ「毎日どこを塗っていくのか緻密な計算をしながら作業は行われていく。天気が良ければ休日だろうと現場に出て、なるべく雪が降る前に作業を終わらせるような心がけた今回の現場。無理はせず確実に、そして安全に作業を進めていくよう、小柳建設（株）の川瀬は指示を送る。

「川瀬さんは、毎日早く終わらせる工程についての打ち合わせを行いました。施工として支障の出ない対策を相談したらすぐに取り掛かって頂き、遅れが出ずに作業を終えることができました。作業中には「事故だけはゼロでいきましょう」と言われていました。とにかく作業に没頭できるような環境づくりをしてくれるのがありがたいです。どの柱から塗っていくとかは、こちに任せてもらった。作業に集中できるように配慮してくれたり、お願いをしたらすぐに対応してくれたり、それが私たちのような職人にとっては一番ですからね」（金山さん）。

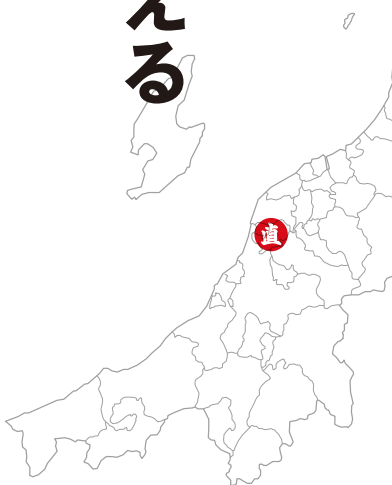
今回のペンキの色は、大自然の景観との親和性を重視した色が使用されている。訪れる観光客にとって身近な砂防ダム completion はもうすぐだ。

協力会社 株式会社服部塗装 金山 浩之さん

2

新分水消防署建設工事

美しい消防署を支える 6本の制震装置。



燕市分水桜町の消防署は、住宅が密集する中にある。旧消防署が老朽化し、平成25年9月から約1年かけて工事を行ってきた。消防署から大河津分水までは約600mの距離。この場所一体は、3年前の新潟・福島豪雨の際に氾濫危険水位を越える時間帯があった。それを教訓として、新消防署にはさまざまな工夫が施されている。

「2階の床の高さは、5mと通常よりも1m以上高い。水害が発生しても消防署の機能が失われないように、発電機室や事務室、備蓄倉庫などはすべて2階。万が一の浸水時には船着場にもなるよう、2階には船を停める専用の金具を取り付けています」（小柳建設（株）／渡邊重樹）。

また、水害だけでなく、地震の多い新潟にとって、その対策も万全だ。2階建ての消防署は制震構造になっており、6本の制震柱で揺れを吸収することができる。万が一、地震の被害に襲われたとしても、近隣の住民が安心して逃げ込むことができる。

消防署としてそれらの重要な機能だけでなく、今回の場合は、いわゆるコンクリート打ち放し仕上げの、魅せる意匠、部分を繊細な施工技術で表現しなければならなかった。

「施工する私たちにとっては、プレッシャーもかかりますが、やり甲斐もありますね」（渡邊）。設計事務所と毎週のように打ち合わせを重ね、慎重にコンクリートを打設していく。雪や雨が混入することは、強度に関わるため細心の注意が必要だし、美しくコンク



渡邊 重樹
小柳建設（株）建築事業部／所長

住宅が密集した地域での工事のため、騒音、振動や粉塵には十分注意しました。夜遅くなりそうな時や土日の作業になりそうときは、こまめに付近のみなさんとコミュニケーションをとり続けました。そうすることで工事への理解を頂くことも私たちの大切な仕事です。



紅一点。ムードメーカーとしての大きな存在感。

今回の工事のキーポイント、コンクリートの打設。その部分の管理を担当するのが、株式会社丸い組の長谷川さんだ。工事現場では数少ない女性。男性の多い現場にあって、小柄ながら誰よりも大きな甲高い声で指示を出す長谷川さんは謙虚にこう話す。

「いろんな現場を管理してきましたが、自分の中でもこの現場はチャレンジなんです。それほどたくさんさんのコンクリートを使用しますし、打ち放しとあって、私だけでなく職人さんもうもいつも以上に気を遣います。1日多い時で400mのコンクリートを打設しなければならぬ時もあります」(長谷川さん)。

実家が建設会社だったということから、小さい頃から自然と「現場の男たち」の中で育ったため、ショベルカーやトラックが目の前にあるのが、当たり前前の生活だったと言う。建築に興味があり、大学は家政学部住居学科へ進学。卒業後、この業界へ「自然と」足を踏み入れた。

「女性だからと特別な扱いはなく、先輩や現場の職人から、今も昔も厳しく鍛えられています(笑)。コンクリートはこう見えて、非常にデリケート。夏はコンクリートを打つ前と後に水を撒きます。そうすることで固まる時に発生する熱によって出るひび割れを防ぐことができるんです。また「一方で冬は打設する前のコンクリートをシートで覆って保温します。コンクリートは常に湿度を保たないといけません。また雨や水が入っても強度に聞るので気が抜けませんね」(長谷川さん)。

渡邊との仕事は、「現場の意見も取り入れて頂きつつ、対応も速いので、非常にスムーズに仕事できています」と語る長谷川さん。コンクリートの打設が多く、緊張が続く現場。楽しく、厳しく、笑顔で動き回る長谷川さんが「ムードメーカー」になっている。

共同企業体会社

株式会社丸い組 建築部／主任 長谷川 雅子さん



リートを仕上げるなければならない。それができたのも、渡邊自身が共にこれまで仕事をしてきた協力会社の職人と共に仕事ができたと大きいと言う。

「現場では、鉄筋工、型枠大工、左官工、電気工事士など、さまざまな職人のみなさんと仕事をしています。延べ6000人以上の人間がこの工事に携わり、全員とコミュニケーションを取りながら、同じベクトルで新しい消防署の完成を目指します」(渡邊)。

新消防署では、地元への防災・救助活動などの講習会も開催され、地域交流の拠点になる予定。社会的意義の高い仕事を前に、完成に向けて「チーム渡邊」の舵取りにも力が入る。



高度な施工力が試される「鉄筋コンクリート打ち放し仕上げ」の壁面。



屋上は洪水時の避難場所にもなるため、鉄筋コンクリートの打設にも力が入る。



工事名:新分水消防署建設工事 工事期間:平成25年9月30日～平成26年12月19日 発注者:新潟県燕市

3

街に、人に貢献するための社内での取り組み

〈女性技術者の取り組み〉

これまでのイメージをくつがえす。
ドボジョが建設業界の未来を救う？

目隠し板が設けられた女性専用トイレ。全身鏡や専用ロッカーを設けた現場事務所内の女性専用ルーム。「関屋分水路河道掘削工事（その7）」の現場では、従来の建設工事の現場でほとんど見られなかった光景を見ることが出来る。

小柳建設では、女性技術者の育成にも力を注ぐ。どうしても「男性社会」というイメージの強い建設業界において、どうすれば女性の感性を活かすことができるか。実際に女性技術者として活躍する環境保全事業部の村上に話を聞いた。



「安全のために現場や事務所をいつも清潔にしておくこと、近隣住民の方への細やかな気配りをするなど、建設業界でこれまで大切にしてきたことを、より高いレベルで実践していくことが女性にはできると思っています。先日、地元の大学で多くの女子学生を前に建設業界についてお話をさせて頂く機会があったのですが、そこで当社の取り組み事例を紹介すると興味を持っている人が多く嬉しかったです。ドボジョ（女性土木技術者Ⅱ「土木女子」）が、建設業のイメージを変えていきたいですね」（村上）。

〈ボランティア活動〉

この街で仕事をさせて頂いている。
社内交流も兼ねた地域貢献への取り組み。

「加茂山「斉清掃」、「七穂排水機場クリーン作戦」、「福島潟クリーン作戦」、「信濃川をきれいにする会」への参加…自社の事業のみならず、こうしたボランティア活動を通じた地域貢献を10年以上続ける小柳建設。年に4〜5回、建設会社が積極的にボランティア活動を行う理由について、営業本部長の片野はこう話す。

「私たちはいろいろな地域のお仕事をさせて頂いています。公共事業は、元を正せばその地域の方々がお客様。ここで働かせて頂いている感謝の気持ちも込めて毎回

参加しています。主に休日に開催するため、社員が家族を連れてきて子どもに「街にゴミを捨てちゃいけない」と教育をしたり、異なる部門の社員同士の交流の場になったりもしています」（片野）。

ボランティア活動の際には、全員で同じジャンパーを着る。それを見た地域の方から「いつもありがとうございます」と言ってもらえることが増えたという。これからも小柳建設による地域活動は続いていく。



〈緊急雇用創出事業〉

建設業界の人材育成のために。
若い世代へ仕事の意義を広く伝える。

深刻な人材不足に悩まされている建設業界。少子高齢化、業界へのイメージ：若い世代の技術者が育成されていない状況をふまえ、地域経済の活性、雇用創出のために「地域人づくり事業」という緊急雇用創出事業を数年前に国が立ち上げた。未経験者を募集して、建設業の技術を約半年間にわたり指導、資格取得を目指すというプロジェクト内容だ。その受け入れ先として手を挙げたのが小柳建設。その意図を舗道事業部長の吉田に聞いた。

「経営理念の1つとして『技術の伝承』を掲げる当社は、これから人づくりに注力していきます。建設業というものは、いわゆる経験工学。現場で何年も経験を積んで一人前になっていきます。その入口をつくってあげるために、今回のプロジェクトへの協力を決めました。モノづくりの仕事が、つらいけれども楽しいか、いかに社会的な意義があるかを説いています」（吉田）。



参加者からは「資格を取って自信を付け、将来は建設業界で働きたい」「団結力を感じる小柳建設で仕事を学べるいいチャンス。いつか地元のための仕事をしたい」という声が寄せられている。

〈女性目線の安全パトロール〉

現場の「当たり前」を疑うことから。
安全な労働環境のために女性の目線を。

現会長・小柳直太郎と女性社員が数名並んで、ヘルメットを被り、作業着を着て工事現場を見回っている…そんな光景が小柳建設の現場では最近見られる。これは、これまでも継続的に行ってきた「役員パトロール」と呼ばれる安全点検のための現場パトロールに、女性目線で労働環境をチェックする取り組みを追加したものだ。パトロール隊は、現場に従事する女性技術者の社員と、内勤の女性社員で構成されている。普段気づかないような改善点を発見するために、あえて全く現場の知識がない社員も参加させている。普段は内勤の総務部人事課の堂谷は現場に足を運んだ経験をこう話す。

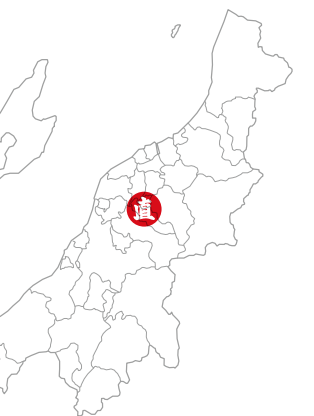
「例えば、現場事務所の玄関。雨の日にびしょ濡れになって汚れていました。本社では玄関にマットを置き、雨の日は滑ってお客様や社員が転んでケガをしないように頻繁に拭いていたので違和感を持ちました。副社長から『気づいたことは何でも言ってみよう』と言われていたので、そういった指摘をしたところ、すぐに現場ではマットが置かれ、安全かつ清潔に保つように改善されました。これまでの『当たり前』を疑い、より良い労働環境のために会社として取り組んでいきたいです」（堂谷）。



4

「一般国道403号三条北バイパス地下横断構造物設置その2工事

全長200m。軟弱地盤との格闘。



工事名:一般国道403号三条北バイパス地下横断構造物設置その2工事 工事期間:平成26年2月3日～平成27年3月13日 発注者:新潟県三条地域振興局

バイパス下を貫く立体交差にある
職人たちの安全へのこだわり。

広大な田畑を走る予定の三条北バイパスの建設工事。盛土の上に道路が整備され、のちに多くの車がこのバイパスを走ることになる。実はそのところどころには、バイパスを横切るための地下道が建設され、地域の方々が使う重要な生活道となる。

盛土の下を通るとはいえ、単純に地下に穴を開けて通すだけではない。十分な天井高を確保するために土を掘り、「地下道」をつくらなければならないのだ。

「今回難しかったのは、地盤改良。もともと田畑ですから地盤が強い。土を掘り進める時に、水が出てしまうとコンクリートの打設ができなくなるので、しっかりと地盤改良してから作業を進めていきました」（小柳建設（株）／田中利栄）。

今回の工事の全長は200m。地盤改良には、約1ヶ月の期間を要した。重機の先端からセメントを出すことができる特殊なマシンを使用して、現地の土とセメントを地中で混ぜ合わせ、固めながら掘り進めていく。バイパスの下を通る地下通路部分は、4つに分割されたボックスカルバートを工場で作製し、それらを現地に「合体」させて完成する。

「地盤改良ができたらずっと掘り進めることができます。ここは軟弱な地盤であるため、周辺への影響を考慮して掘れる範囲も最小限に限られて設計されています。そのため、地中での型枠やコンクリート作業を50cmの隙間で行わなければならない場所もありました。そこで安全確保のため、入念な地盤の点検に加え側面に鉄の網を貼って落石などの防止に努めています」（小柳建設（株）／中静真吾）。

「当初の設計図面を見ると、コンクリートのつなぎ目に隙間ができる構造であったため、お互いの範囲同士へと少し延ばし合うことで、止水性を高めるように発注者に提案しました。地盤改良はしていますが、どこから水が出てくるとも限らないですし、構造物の強度にも関わります」（田中）。

完成すれば、ここは地元の方たちが行き交う生活道となる。バイパス下を通る真っ直ぐな道をつくるプロセスには、職人たちの安全へのこだわりが詰まっている。



中静 真吾（左） 小柳建設（株）土木事業部/事業部長

とことん私たちが「使う人の立場」に立って現場を管理できるかが大切だと思います。私たちがゴールを明確に想像することで、発注者の要望を汲み取り、現場に的確な指示を与えることができるので、職人のみなさんの仕事のしやすさにもつながるんですね。

田中 利栄（右） 小柳建設（株）土木事業部/所長

今回は工事に関わる20軒ほどの農家のみなさんへご説明に伺いました。工事をしても農作業を止めるわけには行きませんので、迂回路をしっかりと整備してご納得頂きました。地域住民のみなさんとのコミュニケーションも「工事の質」の1つだと思っています。





プラントに泥土が運ばれてきて砂と粘土に分別される。



川沿いを歩く人たちが見えやすい位置に工事状況を掲示。



加藤 康之(左) 小柳建設(株) 環境保全事業部 浚渫工事課/課長
志田 敏和(右) 小柳建設(株) 環境保全事業部 浚渫工事課/主任

「工期が厳しい中でも、現場スタッフの方々と『今日はここまで頑張りましょう』と目標を共有して工事を進めるようにしています。現場の意思を1つにすること。見えない部分ですが、精度の高さを生むのはそういった『人と人のコミュニケーションがいかに充実しているか』だと思います」(加藤)



工事名:毛長川河床掘削工事(その12) 工事期間:平成26年9月19日～平成27年3月27日 発注者:東京都第六建設事務所

「浚渫と言え小柳建設」を証明する。

人間が汚した川を人間がきれいにする。
高い技術力を要する毛長川の浚渫。



東京都と埼玉県の境目にある密集した住宅地。その近くを流れる毛長川の掘削工事が15年前から行われている。工事を請け負うのは、浚渫技術世界」を目指す小柳建設。

今回で4回目となる工事は、浚渫土量6440m、浚渫箇所から土砂処理ヤードまでの距離が遠く、高い技術が必要とされる。そこで、今回採用されたのは、「NETIS」という公共工事における新技術活用システムにも登録されている小柳建設の「泥土吸引圧送システム」。1750mという長距離をパイプライン1つで圧送できる数少ない工法である。どんな狭い場所でも大型トラックが入れば浚渫可能であることや、都市河川に多い橋の下を簡単に通過できるコンパクトさも大きな特徴だ。浚渫船の能力と土砂処理プラントの能力、ダンプの搬出能力。これらの施工サイクルをうまく噛み合わせるように工夫をしながら工事は進められる。

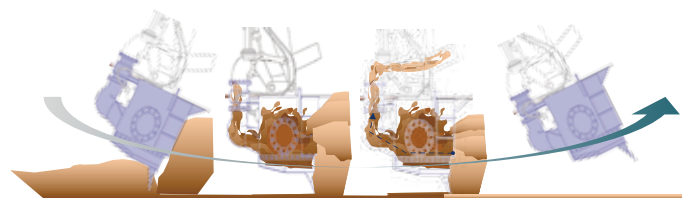
「工事を完璧にやり遂げ発注者に満足して頂くことはもちろん、こは住宅街なので地域の方とのコミュニケーションに重点を置いています。みなさんが見える場所に設置した掲示板には、この工事が水害対策、河川環境改善の目的で行われていること、今日はどこで何をやっているのかを、分かりやすく広報しています。スタッフにいつも言っているのは、『自分からあいさつをしよう』ということ。そこから会話が生まれて『苦労様』とか『工事は順調かい?』と話しかけてもらえるようになる。それくらい、地域の方にとって私たちが身近な存在でありたいです」(小柳建設(株)／加藤康之)。

広報板を設置したことにより地域の方からの工事への理解は確実に深まっている。地域の町会だよりの紙面に、今回の工事について説明するスペースを頂くなどの結果にもつながっている。

「工事をやるということは、その場所に暮らす人たちに『工事をやってもらったよかった』と思ってもらうことが究極の目的だと思っています。安全で、安心して頂ける工事を行うための手間は惜しみません」(小柳建設(株)／志田敏和)。

「浚渫と言え小柳建設」という評判が正真正銘のものであると証明するために、過去最高の工事品質を狙う今回の現場。「人間が汚した川を人間がきれにする」、大きな使命感にやりがい追求し彼らは全身全霊を捧げる。

水平掘削イメージ図(側面図)



東京ドームの広さで格闘する 3cmの攻防。



工事名:一級河川五十嵐川災害復旧助成事業 遊水地掘削(その3) 工事 工事期間:平成26年5月28日～平成27年3月15日 発注者:新潟県三条地域振興局

4万²m²の場所で、 13万³m³の土砂を搬出する 繊細な技術。

平成23年7月の新潟・福島豪雨によって、五十嵐川は氾濫し、流域の街に多くの被害をもたらした。ここは25ページの法面緑化工事と同様、二度と豪雨による被害を繰り返さないために行われている遊水地掘削工事である。五十嵐川の水量が増えた時に、一時的に水を貯めるための場所だ。

遊水地工事は、いくつかの工区でさまざまな企業が請け負っているが、今回、小柳建設の現場が最も広く、面積で4万²m²。体積で13万³m³の土砂を搬出していく。ショベルカーで掘り進め、ダンプトラックで搬出するという一見、単純作業に見える現場だが、実は繊細な技術そして計算で成り立っている。水の滞留を防ぐため、川下方向へ3cmずつ傾斜をかけて掘削しなければならない。このような細かい規定は、遊水地の体積量を厳密に管理するためである。発注者からの要望よりも、小柳建設ではさらに厳しい基準で運用している。

1日に掘削できる量は、1台のショベルカーで3000～4000³m。小柳建設では最大7台のショベルカーを同時に動かすことで効率化を図った。10tダンプトラック1台で5m³の土の搬出が可能であることから、1日50～60台体制を組んでいる。雪が積もり始める12月下旬までに工事を終えなければならないからだ。

搬出された土砂のほぼ半分の6万2千³m³は、新潟市と長岡市に運ばれていく。工事現場からそれぞれ1時間ほどの場所だが、予め実際に車で走行し、時間帯による渋滞などを加味し、ダンプトラックが戻ってくるまでの時間を予測。逆算して掘削量まで調整している。ショベルカー操作には繊細な技術が要求されるため、人員確保に難航したものの、順調に工事は進行していった。

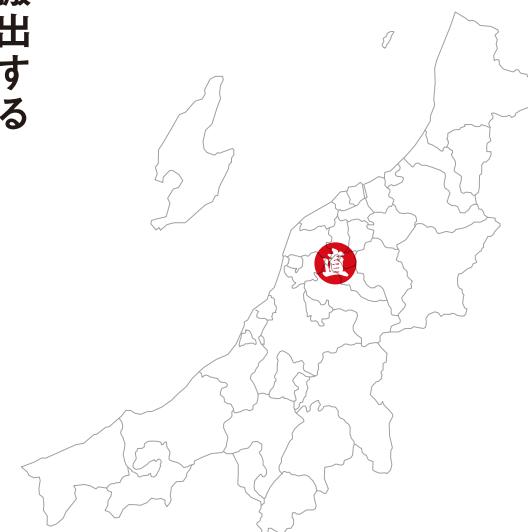


トラックの台数、作業時間まで緻密に計算された現場。



村山 宏樹
小柳建設(株) 土木事業部/所長

より効率的に工事を進めるため、発注者と相談し、遊水地から一般道へ出るまでの1kmほどの距離で、トラック専用の道路をつくり、より安全に、効率的に搬出できる仕組みを整備しました。



〈介護福祉事業〉

「介護を卒業してもらったための介護施設」。
小柳建設だからこそ生まれた必然の新事業。

平成26年末に新たな介護福祉事業を立ち上げた小柳建設。同年12月にオープンした「茶話本舗デイサービス天佑戸頭」は、古民家をリフォームした温かみのある施設だ。施設長である小林に話を聞いた。

「私たちが大切にしているのはご利用者様の要介護度を下げていつかここを卒業してもらったための介護施設であること。ご利用者様一人ひとりのご希望に合わせたサービスを提供することです。例えば、必要以上のバリアフリーを施さずあえて日常生活ができるようにしたり、施設側の都合に合わせて好きな時間に入浴ができたり。茶話本舗では1日の定員10名あたり介護職員は4人。ご利用者様、そこで働く人にとって、お互い快適な気持ちでそこで過ごせるゆとりのある環境です。ずっと変わらない高齢者への想い、接遇レベルの高さ。小柳建設だからこそ、必然的に生まれた介護福祉事業だと思います」（小林）。

福祉事業などの社会整備を広めていきたいという注目の新事業。今後も全国的に展開に向けて画策中だという。



〈新潟県優良工事表彰・優秀技術者表彰〉

様々な制約に負けない工事で、社内初の90点台。

平成26年11月10日に開催された新潟県優良工事表彰式において、「新潟県優良工事表彰」と「優秀技術者表彰」を受賞した小柳建設。現場代理人で土木事業部長の中静にその要因を訊ねた。「制約条件の多い災害復旧現場を、工期内にすべて完了させたことが受賞につながったと思います。同時進行している関連工事との調整、崩落土の上での作業、予期できない自然の猛威、工期など、あらゆる制約と闘いながらの工事でした。個人的には、社内に向けて工事点数90点が取れることを証明できたことも嬉しかったですね」（中静）。



「優良工事表彰」(工事名:遊場地区災害関連緊急地すべり対策(谷止工)工事)
「優秀技術者表彰」(工事名:遊場地区災害関連緊急地すべり対策(谷止工)工事/
受賞者:中静真吾・現場代理人)

〈国土交通省北陸地方整備局 安全管理優良受注者表彰〉
徹底した安全への意識で無事故を保つ技術。

平成26年9月12日、小柳建設が現場の安全管理が特に優秀で他の模範となる受注者として、国土交通省北陸地方整備局より「安全管理優良受注者」の表彰を受けた。受賞の対象となった工事の現場代理人で舗道事業部長の吉田に想いを語ってもらった。「30kmある施工区間の信濃川の管理工事を3年間担当させて頂き、その間ずっと無事故。さらに、地元住民の方とのコミュニケーションを密に取っていたこともあり、苦情などのクレームもゼロでした。協力会社の方に『小柳建設との仕事は安心してできる』と思ってもらうために、無事故を保つのも『技術』。綺麗な現場を保つことも『技術』。会社としての安全への取り組みが評価された表彰だと思います」（吉田）。



「安全管理優良受注者表彰」(工事名:三条出張所管内堤防等維持管理工事)

〈営業本部体制会議／本音で語ろう〉

永遠に続く企業であるための営業体制。
若手社員も忌憚ない意見を出し合える場。

社員が本音で語り合える場をつくることを目的として、小柳建設が新たにスタートした「営業本部体制会議」。今後、多角的な事業展開を行っていく中で、多様化するお客様のニーズに対して満足して頂けるような営業体制の確立を目指すための会議だ。参加者は、営業、営業管理、積算部門など、役割の異なる社員たちが年代を問わずに集まり、社長、副社長もオブザーバーとして同席する。スローガンは「次世代につながる、営業の仕組みづくり」。

日々の業務の中で感じる、改善すべき課題を抽出し、その原因を話し合い、具体的な解決策を全メンバーで導き出していく。営業本部長仕切りのもと、若手社員からも次々と忌憚のない意見が飛び交う会議となっている。

「業務が忙しくなるとどうしてもお客様視線を失ってしまい、引き渡しに立ち会えなかったり、会社として接遇用語が統一されなかったりしていました。そういった問題点に対して、常にお客様へ満足度を向上させるための仕組みが生まれています。若手から上層部まで、同じ場所で意見を言い合える場があり、会社づくりに参画できる面白さもありますね」（営業本部／若手社員）。

〈決起大会〉

全従業員が1年間の労をねぎらい合い、
次の1年に向けて一丸となる日。

小柳建設で最も重要な行事として位置づけられている年に1度の「決起大会」。始まりは株式会社化してから29期まで遡る。現会長が全社員への「感謝表明」を目的としてスタート。社内賞の表彰や余興、イベント企画などが行われ、日頃は各現場や各事業所で働いている全従業員が交流を深める機会となっている。

「1年間、雨風の中でも真夜中でも一生懸命働いてくれた全従業員に対して、ありがたうの気持ちを伝える場として毎年開催しています。みなさんに、一度しかない人生の中で『小柳建設で働いていて良かった』と思ってもらうための大切な日と位置付けています」（代表取締役社長／小柳卓蔵）。

社内の若手社員からは、「仕事で電話をしていて、名前は知っているけれど、顔は知らない人と直接コミュニケーションがとれるのが嬉しい」「会社としての年間目標を全社員で共有できることで『丸になれる』という声が挙がる。70周年である平成27年は、月岡温泉に全社員で1泊2日の開催予定。いつもとは違う表情の社員たちが1年間の労をねぎらい合うことだろう。」





工事名:クリオ船橋新築工事 工事期間:平成26年1月17日～平成27年4月28日 発注者:明和地所株式会社

確かな安心のために、 敷地内すべてを考え抜く。

万が一、災害が起きた時にも、
すぐに復旧できるインフラづくり。

千葉県・船橋駅。都内へのアクセスの利便性から多くの人が集まり、マンション開発が盛んな地域だ。駅から千葉港に向かって南下した、海に面した京葉道路からほど近い場所。そこに13階建てのマンションが建てられている。しかし、ここは液状化危険地域。建設にあたって、マンション本体のみならず、敷地内のライフライン設備を守るための闘いがあった。

「この地域はもともと液状化の危険地域であることはわかっていました。2011年の東日本大震災の時にも実際に地盤がゆるくなって液状化を起こしていました。ため、マンション本体はそれをふまえて杭を打つなどの入念な対策を練っていましたが、同じマンション敷地内に設置される電気や水などのライフライン設備も、万が一の時に備えて保護しなければなりません。例えば、『屋外キュービクル』と呼ばれる、電気をマンションへ届ける大元の部分。もし地盤の液状化が起きてしまった際に、公共のライフラインが復旧と同時にマンションのライフラインも復旧できるように、この屋外キュービクルをどのように補強するのか。そのための具体策を考え抜きました」(小柳建設(株)／東憲弘)。

そこで出たのが、マンションの敷地内にあるゴミ置き場や立体駐車場の地盤補強を行い、その付近に屋外キュービクルを隣接するというアイデアだ。具体的には、ゴミ置き場と立体駐車場に杭を打ち込み、液状化により地盤が壊れないように補

強した。それ以外にも、建物内に水を送る給水ポンプは、岩盤まで達する杭によって頑丈なマンション本体の地下ピット内に設置した。こういった対策によって、実に困難とされる液状化危険地域における安全・安心なマンション建設を実現することができた。

「もちろん、私たちだけの力ではありません。災害が起きた時でも安心できるマンションをつくり上げるために、発注者、設計者、協力会社など、工事に関わるすべての人と『いい工事』を追求した結果だと思います」(東)。

1つの現場に心を込める。そんな小柳建設の姿勢は、今日も変わらない。



東 憲弘
小柳建設(株) 東京建築工事事務所/所長

工事現場というものは、その街の人たちにとっては、道が規制されたり騒音が出たり、基本的には「迷惑なもの」だと思っています。それを十分に理解しているからこそ、工事に関する情報を積極的にオープンにしてコミュニケーションを多くとり、「彼らになら任せてもいい」と思ってもらうことが大事だと思います。

9

一般国道403号県単舗装道補修工事

想定外を想定する、 道路工事の緻密な計算。

三条市内へ抜ける交通の要所。
道路舗装工事の裏側にある緻密な計画性。

南蒲原郡田上町羽生田交差点は、信越本線羽生田駅から500mほど南に行った場所にある。交差点の一手手前には、福島方面から伸びる道路があり、多くの物資を運ぶ大型車が高速入口（三条市）へ抜ける交通の要所だ。朝夕に限らず交通量は多く切れ目がない。それゆえ道路舗装工事を行うことが困難な場所だ。今回はこの羽生田交差点を中心に、交差点の手前から、跨線橋までの全長約200mが舗装工事の区間になる。

「切れ目のない交通量、痛みの激しい交差点付近の道路状態を見ると、通常の道路舗装工事よりもかなり緻密な計画を立て、迅速かつ丁寧な工事が必要と感じました」（小柳建設（株）／皆川圭太）。

作業は5日間。短い期間での工事が舗装工事の特徴ではあるが、その初日で工事計画の変更を迫られる場合もあると言う。

「羽生田交差点は消雪パイプが途中で折れ曲がり、想定外のコースに設置されていました。そこで工事の施工をどの様な順序で行っていくべきかを計画し、何度もシミュレーションする必要がありました」（皆川）。

今回の道路工事は、まず現状のアスファルトを削る切削作業から始まる。センター側の消雪パイプや端部の構造物などはオペレーターが手動で調整し、アスファルト以外を削ることがないようにギリギリで避けていく。まさに職人技である。

「1日に使用する大型ダンプは5台、現場スタッフは10名。ダンプトラックの往復時間



痛みの激しい交差点付近。



ダイヤモンドと同じ硬度の刃で路面を削りとる。



23

発注者、設計者、施工者と
同じ想いでモノづくり。

海に近い今回のマンション建設工事では、地盤を固める基礎工事が重要になる。いわゆる、「工事のための工事」だ。それを担当したのが、東京都江戸川区に本社を構える永代リースシステム株式会社。「山留め」という、地盤を掘削する時に支持材を用いて周辺の地盤が崩壊しないようにするための工事のプロフェッショナルだ。

「埋立地であるこの船橋駅周辺は、内陸のほうは『ローム地盤』という安定した地盤なのですが、海に面したここは『砂地盤』。決して条件がいいとは言えません。実際に現場で測定してみると、想定していたよりも地盤はゆるかった。また、天候にも恵まれずに苦勞をしたり：最終的には工程内で満足いく工事ができました」（河尻さん）。

現場の周辺に木造の住宅が多いことも本現場の特徴。木造建築は、地面に杭を打っていないため、この工事によって周辺の地盤に影響を与えてしまうことが懸念された。その影響を最小限に抑えるために、小柳建設と協議しながら河尻氏が提案したのが「シートパイル」を使った山留め工事だ。「私たちが大切にしているのは、目の前の課題に本気で取り組みむということ。それは、発注者、設計者、施工者と同じ想いでモノづくりに向き合うことと言えるかもしれません。今回の工事では、多くの苦勞や困難がありました。小柳建設さんと一緒にこの現場をやりきったという自負があります」（河尻さん）。

10年以上前から小柳建設との協業がある同社。互いの信頼関係から生まれるマンションの数々は、多くの住む人の信頼を生んでいることだろう。

協力会社

永代リースシステム株式会社 営業部／課長 河尻和弘さん



災害に強い堤防をつくる最後の仕上げ、 法面緑化。のりめん

10

一級河川 五十嵐川災害復旧助成事業 法面保護工事（高岡、滝谷工区）



皆川 圭太 小柳建設(株) 舗道事業部/技士

今回、あまりに交通量が多いので、実は夜間の工事も検討しました。しかし周囲には民家が続き、夜は騒音が問題になってしまい、大型車の交通量は夜間も変わらない。工事の難易度は高かったですが、個人的にも学びの多かった現場でした。

から、切削作業を行える時間（距離）や、アスファルトを新たに復旧する時間などをすべて分単位で計算して、事前に工事のスケジュール計画を組み立てます。それでも万が一の想定外も考え、工事初日の作業開始場所をどこから始めるべきか計算し、車で実際に往復時間を計ったりして検証を繰り返して決定する。また交通量の関係・安全対策の面から誘導員を14名とし、通常の7倍の人員を配置して工事を行います（皆川）。

さらに、今回は大型車の跨線橋方面への進入禁止を決め、迂回路を設定した。多くの車が要所として利用する跨線橋方面への通行は、大型車の内輪差が大きいため、作業員の危険を伴い作業自体にも支障が出ると判断し、皆川は2週間前から周囲に看板を設置し、関係機関への事前周知を徹底した。そのおかげでほとんどの大型車は間違えることなく迂回路を選択することができた。

行き交う人や作業員の安全を第一に考え、しかも迅速に、正確に工事を行っていく。街でよく見る道路舗装。その裏側には、極めて緻密な計画性がある。



工事名:一般国道403号県単舗装道補修工事 工事期間:平成26年8月25日～平成27年2月13日 発注者:新潟県三条地域振興局

堤防の土壌流出を防ぐためにとった、2つの工法。



三条市島潟地区は、平成23年7月の新潟・福島豪雨によって、五十嵐川が氾濫し、多くの被害を受けた地域だ。カーブの多いこの川は、濁流がぶつかり、五十嵐川に隣接する多くの地域で堤防を乗り越えた。この場所は、昨年のCSRレポートで紹介した堤防のかさ上げ工事を行った場所。これまでよりも1m堤防を高くすること、また、もしも五十嵐川が増水しても、被害を食い止められるようにと行った工事だ。その工事もすでに終わり、今では堤防の上には車が走る道路も整備された。

今回の工事は、堤防自体の強度を維持するため、斜面である法面（のりめん）を保護する工事。植物で緑化することで、土砂の崩れを防ぐことができる。

「今回の工事は、野芝種子吹付工と言って、堤防の法面保護の目的でよく使用される工法です。堤防の法面には芝を植生することが国土交通省の指針ともなっています。芝を植生することで、堤防自体の強度を維持することはもちろんですが、芝は背丈が短いので、何か異常があった時に発見しやすいんですね」（小柳建設（株）／石塚俊也）。

今回の工事の前に石塚が現地で調査を行ったところ、土が風化し、土壌流出が散見された。実際、地元住民のみなさんも土が側溝に流入することに、苦慮していた。「もともとは野芝種子吹付工のみでの工事だったんです。しかし、私たちは住居

新潟市から日本海沿いに北陸地方を縦断する国道8号線。昼夜を問わず交通量の多い道路である。それに伴う騒音や振動などの沿道環境の改善、市街地における交通渋滞の緩和を目的としたバイパス整備工事が、今回の「白根バイパス6・11工区改良工事」だ。

「今回の工事は、農道ボックス・水路ボックスをつくる『その3工事』と、サーチャージ盛土・農道ボックスをつくる『その5工事』と、小柳建設で2つの現場を担当しています。両工事共に、足場上での高所作業、重機・クレーン作業、型枠支保工・掘削盛土作業等、『三大災害』を引き起こす要因が潜んでおり、無事故無災害をスローガンに協力会社と気持ちを1つにし、安全に対して細心の注意を払っています。また、バイパス予定地のこの「帯」は県下でも有数の軟弱地盤地帯です。その5工事では、サーチャージ盛土と呼ばれる軟弱地盤対策工法を行っています（小柳建設（株）／酒井祐一）。

現場周辺には水田、畑地があり農耕者も多く往来する。そんな周囲への心配りも忘れない。その配慮として、工事車両は最徐行させ、騒音と粉塵を極力抑えるようにしている。土を掘る作業は2ヶ月弱で1万mを超え、大型トラックは1日平均20台を必要とする。また、粉塵が舞うことを防ぐために、常に散水車で砂利道を濡らしている。その他にも、国道沿いの道路には、歩行者に向けた工事に関する情報発信も行っ

地元住民に喜んでもらえなければ、その工事をやる意味なんてない。

後世にまで
残る仕事という、
自負を胸に。



11

白根バイパス6・11工区改良その3工事・その5工事



石塚 俊也 小柳建設（株）環境保全事業部 法面工事課/主任

工期が秋から冬にかけてなので、雪が降る前に仕上げなければならないと、急ピッチで進めつつ、安全には十分注意しています。完成という目標を達成するために、職人さんの声、発注者の声に耳を傾け、現場代理人として常に先を見据えた解決策を提示できるよう心がけています。

ている。2ヶ月に1度、航空写真を掲載しながら、工事の進捗状況を掲示し地域とのコミュニケーションを図る。

「私はこの農道ボックスを担当しています。ここは、その3工事の農道ボックスよりも1mほどの高さがあります。上を通る8号線の下を通すこの現場は、後世に残る大きな仕事。だからこそ、みなさんから『ありがとう』と言って頂ける事にしなければならぬという自負があります」（小柳建設（株）／山崎恒昌）。

現場代理人である酒井が、仕事をする上で大事にしていることは、発注者とのコミュニケーション。「この人たちに任せていれば安心」と思ってもらえるような関係を築くことが理想です。そのために、週に最低1度は直接会ってコミュニケーションを交わしています。工事の進捗をきちんと伝えて、事前に問題を予測して、その根拠を資料や写真と一緒に確認しながらすぐに相談・提案をする。発注者も、工事をする私たちも、目的は一緒。いいモノをつくりたい、ということに尽きると思います。そのための最善の方法を共に模索しながら、互いの信頼関係をつくるように心がけています」（酒井）。

事業計画がスタートしたのは昭和62年で、工事着手は平成12年。地域住民のライフラインである道路を、よりよくするための工事。完成の日は近づいている。

酒井 祐一
小柳建設（株）土木事業部/所長

この現場では、周辺地域の方々の第一に考えた現場づくりに努めています。道でお会いしたらご挨拶をする、地域の方とのコミュニケーションは大切です。工事進捗の写真掲示もその1つです。みなさんに喜んでもらえなければ、工事をやる意味なんてないですからね。



「この場所の法面は赤土を使用しているため、栄養分が少ないんですね。ですので、吹付ける内容物の配合を2つ追加しています。1つ目は、弊社の独自技術でイソイル緑化工法でも使用されるアガールライトです。アガールライトは、寒天を製造する過程で発生する副産物で、海藻でつくられているのでミネラルが入っており、土に栄養を付加することができます。また保水性に富む資材なので、土壌表面の乾燥による風化を抑制できると考えました。2つ目は、被覆肥料の追加です。被覆肥料は、養分が1年かけてゆっくりと溶け出すことが特徴で、来春の芝の発芽、生育時に確実に効いてくるはずですよ」（石塚）。

一見、何気ない緑化の現場。しかし、そこには住む人たちの悩みを解消しようと、多くの工夫が施されている。災害に強い堤防をつくるための「最後の仕上げ」。それが緑化なのだ。

が並ぶ民家側の法面に対して植生シート工を発注者に提案しました。前者の工法は、芝が生えそう来年度の春までの間、土壌流出を抑制する効果があり得られません。それに対して植生シート工は、シートが2層構造になっていて、下の層が土壌に密着することで風化を抑制して、上の層が雨水の通り道となることで短期間に土壌流出を防止することができるんです」（石塚）。

しかし、問題もあった。植生シート工は手作業になるため、どうしても時間と手間がかかる。つまり予算もそれだけかかるのだ。野芝種子吹付工は1日2000㎡吹付けが可能だが、植生シート工はどんなに頑張っても1日200㎡しか進まない。しかし発注者と相談し、住民のみなさんの改善要望も多かったため、川側の法面は、野芝種子吹付工で、民家側の法面は植生シート工での工法が決まった。

一方、川側の吹付工では配合に工夫を施している。

工事名:一級河川 五十嵐川災害復旧助成事業 法面保護工事(高岡～滝谷工区)
工事期間:平成26年10月7日～平成27年5月28日(予定) 発注者:新潟県三条地域振興局



地元の農耕者と分かり合えるという強み。

「一緒にくっついている、という実感を持てるのが何よりです。朝と昼の1日2回、必ずやりとりをする機会があるからじゃないかな。『こっちの方法がいんじゃないか?』とか、こっちの要望にただ応えてくれるだけじゃなくて、お互いの意見をぶつけ合うコミュニケーションをとれるのが嬉しいですよ(細田さん)。

白根バイパス整備の「その3工事・その5工事」において、土作業を担当したのが、秋葉建設興業株式会社だ。同社の細田さんが、今回の工事に限らず仕事をすることで大切にしているのは段取りであるという。作業がスムーズに進められるように、たとえ残業をしても、事前の綿密な計画・準備を欠かさない。今回の現場では、土を扱う工事なので、水が最大の天敵であった。梅雨の時期には、周囲の田んぼに泥水が流れないように、次の日のことを計算した排水対策を行った。

また、この現場では技術的にも工夫を凝らしている。GPSシステムによって、土の締め固め部分を管理。どの部分に、決められた回数できちんと転圧されているのかを、第三者が見ても分かるように色ごとに示されるシステムだ。

実は細田さん、新潟県秋葉区生まれで実家は農家。今の仕事をやりながらの兼業農家なのである。それゆえ、現場周辺の農耕者とのコミュニケーションはおのずと深まる。「例えば、この時期だったら田植えだから農耕者の人の往来が多くなるなど分かりますし、使っているオスメの農機具の話なんかもします(笑)。ここは、工事をする仲間はもちろん、地元の人とのコミュニケーションもたくさんある現場。お互いが気持ちよく、心穏やかになれることは大事だと思うよ(細田さん)。

よく日に焼けた顔をゆるませながらそう話す同氏の目からは、土や自然に対する優しさがにじみ出ている。

協力会社

秋葉建設興業株式会社 細田 俊幸さん



工事名:白根バイパス6-1工区改良その3工事 工事期間:平成26年3月15日～平成27年2月27日
工事名:白根バイパス6-1工区改良その5工事 工事期間:平成26年4月1日～平成27年1月20日
発注者:国土交通省 北陸地方整備局 新潟国道事務所



山崎 恒昌

小柳建設(株) 土木事業部/所長

このバイパス工事は、地域の方々全員にとって関係のある大切な工事です。だからこそ、大きな使命感と責任感をもって工事に臨んでいます。いつか工事が完成して街にもっと笑顔が増えるといいですね。



掘り進めると、 古墳時代の生活がそこにある。

この地域にあった確かな歴史を、
この地域の人たちへ
伝えていくという使命。

新発田市竹ヶ花地区は、街中を走る道路の渋滞を解消するため、その広大な水田の真ん中を走る道路工事が来年以降予定されている。その工事に先立って行われているのが、この遺跡発掘調査だ。実はあまり知られていないが、あらゆる土木、建築工事が行われる場合、必ず事前に遺跡の有無を確認し発掘調査を行うよう法律で定められている。まずは試験的に掘ってみて、そこで遺跡などが発見されれば、今回のような本格的な発掘調査工事が行われるのだ。

「2014年10月16日から調査が始まって、年内いっぱいまで続きます。とはいえ、雪が積もってしまう前に終えなければならぬので時間との戦いです。この場所の特徴は『砂』ですね」（小柳建設（株）／福永 徹）。

砂地の場所は、もともと川だった場所が多いが、今のところ川の跡は確認できないと言う。掘り進めていくと、井戸の跡がいくつも出てきたり、他の場所からは大きな壺が出てきたりした。福永は、「このあたりは集落で、砂地であるのは近くの川が氾濫し、何度も水害が起きたのではないかと仮説を立てている。しかし、集落であれば、規則性を持って並ぶ柱穴が見つかることがある。しかしながら、そういう穴は発見できていない。

「もしかすると、これから調査予定の場所や周囲に広がる水田の下に集落跡があるかもしれない」と福永は推察する。

発掘は手作業で行われる。今回の発掘調査に携わる方のうち、半数以上の方が初めて発掘をする。発掘のコツを掴んでもらうのも大切な仕事だ。例えば昔の井戸跡を半分に断ち割って、堆積している地層を1層ずつ削るように慎重に掘っていく。その日の発掘が終わると現場をブルーシートで覆う配慮も忘れない。

「すでにたくさんさんの土器も発掘されています。機会があれば、地域の公民館や小中学校で紹介したいですね。自分の住んでいる場所が昔どういう場所だったのか、そういうことを伝えていくことが、私たちの使命だと思いますから」（福永）。

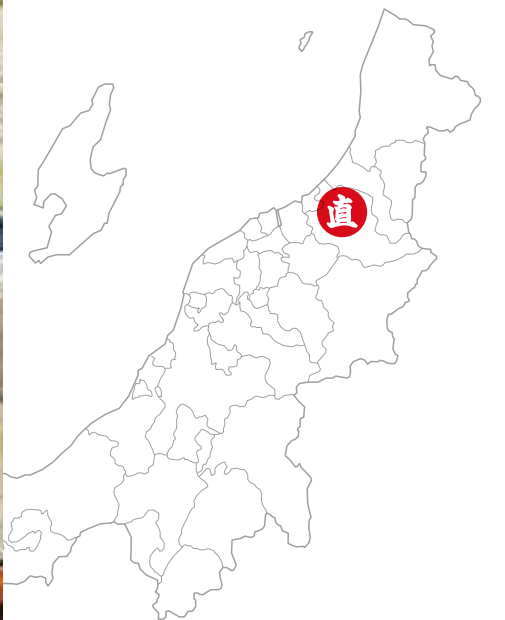
穏やかに、しかし強い意志を持ってそう話す福永。雪の時期が目前に迫ったこの時期の発掘ペースを上げるべく、また古墳時代の現場へ戻っていった。



福永 徹 小柳建設（株）埋蔵文化財調査室

発掘調査は多くの人たちが関わりますが、今回の現場も地域の元気な高齢者の皆さんのご尽力があってこそだと思っています。今回もたくさんの方々に協力頂きました。発掘調査という場がみなさんの働きがいにも少しでもつながれば嬉しいです。

工事名:神明裏遺跡発掘調査業務委託 工事期間:平成26年10月16日～平成27年2月27日 発注者:新発田市教育委員会





発掘調査はほぼ手作業で行われるため、多くの人が関わる。経験を積み重ねるほど、発掘スキルは上達していく。それが自分の手で実感できること、遺跡や遺構を間近で見ることができると、ロマンを求めて何度も応募する人も多い。しかも、高齢者の方の応募が多いのが特徴だ。今回話を聞くことができた松田さん、南川さんもその一人だ。

「私は前職を退職したあとから発掘調査に関わるようになったので、もう7年ほどですね。大昔、中学生の頃、当時の先生に連れられて遺跡見学に行っていた。歴史には興味がありました（松田さん・写真右から2番目）。

「私は1年9ヶ月ほど前から発掘調査をしています。それ以前は食品商社で長く働いていて、退職したのを期に妻の実家であるこちらに移住したんです。発掘調査は、友人がしていたのでそれで興味を持ちました」（南川さん・写真右端）。

二人の手には欠かせない仕事道具がある。南川さんが持っているおたま。料理道具として誰もが知っているものが、大変役に立つと言う。

「深い穴を発見した時、奥まで手を伸ばさずともしっかり土を掘れるんです。ふつうのシャベルだと、柄のところが短いので体をめいっぱい伸ばさないといけないので長時間は結構しんどい。すごいものを発掘できたら、おたまのおかげです（笑）」（南川さん）。

発掘のコツを聴くと二人揃って、「土の色の変わっている場所をいかに見逃さないか」と即答。しかし最初のうちはどこが変わっているのか見分けるのが難しい。

「色を見分けるのは慣れもあるけど、ベテランの先輩に教えてもらうのが一番いい。そうすることで『コミュニケーション』がとれる。この歳になって友だちができるのもこの仕事の魅力です」（南川さん）。

「小柳さんの現場はテキパキしていて仕事がしやすい」（松田さん）。

そう言って、笑いながらまた黙々と仕事に戻る二人。数千年前のロマンを探す仕事は、こうした高齢者の方々の情熱によって支えられている。



おたまが探し当てる、世紀の発見！



小柳建設(株) 代表取締役社長／小柳 卓蔵

創業は昭和20年8月。第二次世界大戦の終戦の年、「鳥も通わぬ」と言われた七谷村(現在は加茂市に合併)で、前身である「小柳組」は生まれた。昭和35年、加茂市へ進出したのをきっかけに社名を「小柳建設株式会社」に。先代は、荒れ果てた日本の悲惨な状況下の中で家族を守るため、そして国土を整備することで、世のため、人のために社会貢献をして、生まれ育って来た地域への「恩返し」をしたいという想いを抱いた。

「創業者である私の祖父は、戦争を経験しています。貧しかった日本で家族を守り、社会のために仕事をしたいという気持ちというのは、当社のDNAのひとつ。また、「人」を大切にするという考えもずっと変わらない想いだと思います。それは、「家族を守る」という想いから、「家族」従業員という発想が生まれ、従業員を大切にするという

考え方が醸成されました。バブルが崩壊して、倒産寸前だった時。どんなに困難があっても、『従業員たちを守りたい』と涙ぐましい努力をする父を見て育ってきました。小柳建設はこれまで、どんなに不景気だろうと、人的リストラだけはしてきません。多くの苦楽を共に乗り越えて来た従業員たちへの「感謝」の想いは、とても強いと思います。こういった『誠実さ』とか『信義を貫く』という姿勢を大切にしながら、社会のため、そして人のために尽くしていくという想いを、きちんと未来に残していきたいです」(小柳社長)。

そして、70周年を迎える今、見据えているのは30年後の100周年だ。

「30年後までに売上5000億円企業グループになろう、と打ち出しています。建設業というのは、政治や社会情勢などに影響を受けやすいのが現状です。これからは、そういった外部要因のリスクにも対応できるよう、新事業への進出も積極的に行っていきます。建設業以外の太い柱となる事業体を築き上げていくことにより、全従業員を守る筋肉質な会社をつくるためです。それは建設業を縮小するというのではなく、また何にでも手を出すというわけでもありません。私が大切にしていることは『飛び石を打たないこと』です。例えば、もともと私たちが30年前にスイミングスクール事業を開始した理由は、子供たちの心の教育をするためです。ご家庭の教育に、祖父母世代にも関わって

頂きたい思い、関わるにも体力や健康を維持することが必須であると考え高齢者向けフィットネスジムとしての機能も取り入れました。高齢者の方たちにたくさん来てほしいという想いから、スロープの付いたプールを新潟県で初めてつくりました。プールの水にもこだわり、塩素剤を使用せず肌、目、髪、喉への刺激が少ない「人間に優しい水」で運営しています。昨年からスタートした介護福祉事業は、そうした高齢化社会におけるお年寄りや地域の人たちのコミュニケーションを創出し、さまざまな社会問題を解決すべく生まれたものです。多角的な事業展開をしながら、雇用を創出し、地域の為に税金を納め、世の中のために尽くしていくことが企業の存在価値です。事業展開する理由は、儲けたいとかお金持ちになりたいというような私利私欲で行うものではないと考えています。社会が必要としていることはもちろん、全従業員の物心両面の幸福追求のためです。新しいことをやればワクワクします。全従業員がそのようにワクワクしながら仕事ができれば、その思いは多角的に発展し、お客様に喜ばれるものになっていくのだと思います」(小柳社長)。

この70周年は、あくまで1つの区切り。次の100周年に向かって、社会のために貢献する、従業員とその家族の幸せを追求する、そして誇りある人と技術を後世に残していく、という想いは継承されていくことだろう。

世のため、 人のため。 70年間、 変わらぬ想い。

70周年にあたり社長インタビュー

これまでも、これからも、
仲間と共に歩んできた70年間。

「社長である私の役割は、先代から受け継がれてきた想いを受け継ぎ、それを全社に浸透させ後世に伝えていくことだと思っています」。その瞳の奥には強い意志が宿っている。70周年という節目、小柳建設の中に脈々と流れるDNAとは何か。小柳建設(株)代表取締役社長・小柳卓蔵氏が、その胸中を語った。



会社概要

社 名	小柳建設株式会社
U R L	http://n-oyanagi.com
本 社	〒955-0047 新潟県三条市東三条1-21-5 TEL.0256-32-0006
創 業	1945年(昭和20年)8月
設 立	1960年(昭和35年)4月
資 本 金	3億5千万円
事業内容	1. 建設工事の請負、企画、設計、監理およびコンサルティング業務 2. 不動産の販売、交換、賃貸、仲介およびその管理ならびにコンサルティング業務 3. 住宅の建設および販売ならびに土地の造成および販売 4. 地域開発、都市開発、環境整備等の事業ならびにこれらに関する請負、企画、設計、監理およびコンサルティング業務 5. スポーツ施設、レクリエーション施設、福祉・健康・医療施設の保有、賃貸および経営 6. 労働者派遣事業法に基づく労働者派遣業務 7. 公共施設の管理、運営業務 8. 遺跡・文化財の調査、測量、整理作業、報告書作成、保存活用、支援業務並びにコンサルティング業務 9. 自然エネルギー等による発電事業及びその運営・管理ならびに電気の供給、販売等に関する業務 10. 介護保険法による指定居宅介護支援事業及び居宅サービス事業 11. 前各号に付帯する一切の業務
許可関係	国土交通大臣許可(特・般-24)第13415号 / 一級建築士事務所 新潟県知事登録(口)第4396号 宅地建物取引業 新潟県知事(2)第4894号 / 測量業許可(1)-33094号 / 特定派遣業許可 特15-300168 ISO9001:2008(品質マネジメントシステム)ISOQAR7276 ISO14001:2004(環境マネジメントシステム)ISOQAR7276 ISO27001:2006(情報セキュリティマネジメントシステム)SGS JP12/080230 OHSAS18001:2007(労働安全衛生マネジメントシステム)ISOQAR7276OHS001JP

事業所

本 社	〒955-0047 新潟県三条市東三条1-21-5 TEL.0256-32-0006(代)
本 店	〒959-1326 新潟県加茂市青海町1-5-7 TEL.0256-52-0008(代)
東京支店	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-9-3 TEL.03-3230-8578
新潟支店	〒950-1344 新潟県新潟市西蒲区福島下新田1261-1 TEL.025-375-1238
長岡支店	〒954-0124 新潟県長岡市中之島4156-8 TEL.0258-66-0007
	新潟事務所(環境保全事業部) / 千川事務所(舗道事業部) / 村上営業所 / 新発田営業所 / 東蒲原営業所 田上営業所 / 燕営業所 / 柏崎営業所 / 魚沼営業所 / 上越営業所 / 岩手営業所 / 宮城営業所 / 山形営業所 福島営業所 / 茨城営業所 / 千葉営業所 / 横浜営業所 / 滋賀営業所 / 岡山営業所 / 東京工事事務所 / 新潟機材センター

健康増進・教育複合施設	ホワイトスイム秋葉スクール 〒956-0017 新潟県新潟市秋葉区あおば通1-6-17 TEL.0250-21-7888
-------------	--

介護施設	茶話本舗デイサービス天佑戸頭 〒950-1475 新潟市南区戸頭599-1 TEL.025-378-3322
------	--

関連会社	株式会社平成建設 / 北陸維持サービス株式会社 / 株式会社エステートコンサルタント / 株式会社阿部電機
------	---

C S R	「BUILT ON」 小柳建設と街の人たちをつなぐ CSRレポート2015 "BUILT ON"とは～を支える、～の基盤になるという英熟語。建設業は人の生活を支える基盤であり、 人のために働く使命感を持って仕事に挑んでいく、という決意を題名に表しました。
-------	---

経営理念	事業を通じて人類・社会の進化・発展に貢献すると同時に、全従業員とその家族の 物心両面の幸福を追求し、誇りをもって会社を後世に伝えるものとする
------	---

道をつくる。堤防をつくる。
マンションをつくる。
街の土台や景色をつくるのが
建設業の役割だとしたら、
たくさんの自然を
よみがえらせることも、
私たち建設業の使命だと思う。
人のために、
自然のために何ができるか。
とことん考え、
真っ直ぐに、貫いていきたい。